

国語教師に期待すること

～社会で求められる人材の育成～

今、社会で求められる力

【企業等が採用時に重視する能力は？】



「コミュニケーション能力」

「責任感」

「ビジネスマナー」

「資格取得」

「職業意識・勤労観」

「基礎学力」

「積極性・外向性」

「行動力・実行力」

「向上心・探究心」

「社会で求められる力」を学生は獲得していない

• 若手社会人を対象とした調査によると、社会で求められる力として

◇問題を認識し、必要な情報を収集・分析・整理し、問題を解決する「問題解決力」

◇進んで新しい知識・能力を身に付けようとする「継続的な学習力」

◇自らの考えで責任を持って自律的にものごとに取り組む「主体性」

◇チームの中で協力しながら自分の役割や責任を果たす「チームワーク力」

◇目標の実現に向けて計画し、自らを律して行動できる「自己管理力」

などの能力やスキルが上位に上げられた。

出典／Benesse教育研究開発センター「社会に必要な能力と高校・大学時代の経験に関する調査」(2010年)

調査対象／社会人：民間企業(従業員数300人以上・1次産業は除く)、官公庁勤務または専門職(看護師、教員など)の

正規職員。大学または大学院卒。社会人1～3年目：1,732人

学生の実態と社会で求められる力のギャップ

企業が学生に不足していると思う能力要素

- 主体性 20.4%
- コミュニケーション力 19.0%
- 粘り強さ 15.3%
- 一般常識 11.0%
- 課題発見力 5.5%
- 独創性 5.5%
- 論理的思考力 4.8% 等

学生自身が自分に不足していると思う能力要素 ()内は企業側の数値

- 語学力 16.5%(0.4%)
- 業界に関する専門知識 11.8%(1.0%)
- 簿記 10.2%(0.1%)
- 独創性 7.6%
- ビジネスマナー 6.2%(3.8%)
- 論理的思考力 6.1%

大学に入学する学生の実態

高校までの学習経験・学習習慣

	全体	一般	推薦	AO	センター
グループワークでディスカッションをする	29.1%	27.0%	29.6%	34.0%	27.0%
自分なりに計画や目標を立てて勉強した	42.5%	45.1%	41.4%	32.2%	43.8%
自分の意見や考えを発表する	41.1%	38.4%	42.1%	47.6%	40.1%
自分に向けた学習方法を知っている	47.4%	50.0%	46.4%	38.9%	48.3%

出典／ベネッセコーポレーション大学事業部「大学生基礎力調査 I」(2011年)

調査対象／大学1年生 全体89,015人 入試区分別(一般入試36,052人 推薦入試34,421人 AO入試6,693人 センター試験利用7,775人 その他4,074人)

協同的な体験や自律的学習、アウトプット型の学習経験が不足している

◆ グループワークでディスカッションを高校までに経験した学生は30%前後、自分の意見や考えを発表する授業を経験した学生は40%前後と多くない。社会で求められる「チームワーク力」「主体性」を獲得する機会が、大学入学までの学習では十分でなかったことがうかがえる。また、計画や目標を立てて勉強した経験があり、自分に向けた学習方法を知る学生は半数以下となっている。「問題解決力」「継続的な学習力」につながる経験は決して多くはなかったようだ。特に、推薦入試、AO入試による入学者は、こうした自律的学習に関する自己評価が学科試験で選抜された入学者よりも低くなっている。

大学に入学する学生の実態

考える力

	全体	一般	推薦	AO	センター
多くの情報から何がいえるのかを考えることが好きだ	50.3%	53.0%	45.2%	50.7%	59.0%
考えをまとめるのが得意だ	41.8%	43.3%	38.5%	41.3%	48.2%
自分で出した結論について、なぜそう考えたのか筋道を立てて説明できる	44.7%	48.2%	39.1%	42.0%	53.6%
新聞やニュースを見るときいつも「なぜだろう」と考える	50.5%	53.3%	46.6%	47.7%	58.1%

自ら考える力は、推薦・AO入試入学者の自己評価が低い

◆ 社会で必要とされる「問題解決力」のベースになるのは、自分自身で考える力である。だが、大学1年生全体では「考えることが好き」な学生は約半数、「考えをまとめるのが得意」な学生は4割にとどまる。なかでも推薦入試、AO入試による入学者は、考える力に関する自己評価はいずれも低く、自信のなさや不安感がうかがえる。考える力を伸ばし、自信をつける機会の提供が必要である。

教科に関する調査結果

—平成31年度全国学力・学習状況調査の結果から—

・ 小学校（国語）

○必要な情報を得るために、本や文章全体を概観して効果的に読むことはできている。

○インタビューの場面で、相手の意図を捉えながら聞き、自分の理解を確認する質問をすることはできている。

○相手に分かりやすく情報を伝えるための記述の工夫を捉えたり、目的や意図に応じて自分の考えの理由を明確にし、まとめて書いたりすることに課題がある。

○漢字（同音異義語）を文の中で正しく使うことに課題がある。

・ 中学校（国語）

○文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをもつことや、文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉えることに課題がある。

○封筒の書き方を理解し、文字の大きさや配列などに注意して書くことに課題がある。

○話合いの課題や方向を捉えることはできているが、それを踏まえて自分の考えを持つことに課題がある。

○自分が伝えたいことについて資料の中から根拠となる情報を取り出して正確に書くことはできているが、自分が伝えたいことの根拠として読み手に分かりやすいように書くことに課題がある。

「社会人基礎力」(3つの能力／12の要素)

前に踏み出す力(アクション)

主体性

物事に進んで取り組む力

働きかけ力

他人に働きかけ巻き込む力

実行力

目標を設定し確実に行動する力

考え抜く力(シンキング)

課題発見力

現状を分析し目的や課題を明らかにする力

計画力

課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力

創造力

新しい価値を生み出す力

チームで働く力(チームワーク)

発信力

自分の意見をわかりやすく伝える力

傾聴力

相手の意見を丁寧に聴く力

柔軟性

意見の違いや立場の違いを理解する力

状況把握力

自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力

規律性

社会のルールや人との約束を守る力

ストレスコントロール力

ストレスの発生源に対応する力

育成すべき資質・能力の三つの柱を踏まえた
日本版カリキュラム・デザインのための概念

【図1】



アクティブ・ラーニングの本質

～子どもの思考が活性化し、課題に真剣に立ち向かう～

- そもそもアクティブ・ラーニングという言葉は、平成24年8月中央教育審議会の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」の中で、すでに記述されており、能動的学修（アクティブ・ラーニング）と括弧書きで記載されていた。「能動」の対義語は「受動」なので大きなとらえとしては「受動的にならない学習」となるが、先述の諮問文では「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」とされている。

アクティブ・ラーニングの本質

～子どもの思考が活性化し、課題に真剣に立ち向かう～

- 一方で「アクティブ」という言葉から、活動性をイメージさせてしまい、授業中に子どもたちが活動する、ダイナミックに動きまわる、何か体験をたくさんさせなければならない、といった誤解を持たれる傾向がある。確かに体が活動的であるということも大事だが、一番活性化してほしいのは子どもたちの頭の中、「思考」となる。
- つまり、「子どもたちの思考が活性化し、真剣に課題に立ち向かっているような状況」が授業の中で起きているかどうか重要になる。

アクティブ・ラーニングの本質

～子どもの思考が活性化し、課題に真剣に立ち向かう～

- もちろん探究的なものもあるが、例えば活用の場面で「より積極的に自分の考えを他者に伝える」、習得の場面で「何のために習得するのか、自身にどのような成長があるかを自覚的に習得する」さらには「個別ではなく子ども同士で教え合う、教えてもらう」といった場面でも、子どもの思考は活性化している。このような学習の状況を授業場面の中に作っていくことがアクティブ・ラーニングにつながる。

アクティブ・ラーニングの本質

～子どもの思考が活性化し、課題に真剣に立ち向かう～

- そうすると、これまで各学校で積極的に行われてきた授業改善の取り組みは、まさにアクティブ・ラーニングであると言える。特に小学校の先生方は熱心に取り組んでおり、例えば問題解決的な学習や発見学習、体験活動やグループディスカッション、ディベートなどさまざまにある。そういったものもアクティブ・ラーニングに含まれ、もちろん言語活動もアクティブ・ラーニングの範疇に含まれる。

アクティブ・ラーニングの本質

～子どもの思考が活性化し、課題に真剣に立ち向かう～

- しかし、**小・中・高等学校、大学と校種が上がるにつれて、より受動的になる傾向がある。**これからは、これらをすべての校種の教室で実施し、質的にも担保していくことが求められてくる。さらに、授業の質の向上には、これまで行われていなかった新しい学習・指導方法を考えていくことも必要であり、例えばジグソー法や思考ツールを使ったディスカッション、あるいはICTなどを積極的に授業に取り入れ、子どもたちがよりアクティブに学ぶ授業を考えることも求められる。

アクティブラーニングの視点

～授業改善の3つの視点～

教育課程企画特別部会「論点整理」において、アクティブラーニングでは、「プロセス」「インタラクション(相互作用)」「リフレクション(振り返り)」が適切に学びの中に位置付けられているかどうか重要とされている。

【図2】

- (1) 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。
- (2) 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広め深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。
- (3) 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

国語科の先生への期待

Q. あなたは勤務校の「言語環境」を意識して
「日常の言葉遣い」に気を付けていますか？



言葉を扱う国語教師として

「話すとき」に気をつけたいこと①



《例1》 私たちは意外に不要の言葉を使っています。

皆さんは朝の打合せの時に「あの一、え一と」を多用していませんか？

→ 一日の流れを確認する貴重な時間なのでわかりやすく簡潔にまとめましょう。

もしかすると授業の中でもつい口に出している？

→ そもそも意味の無い言葉です。多用すると生徒の集中が切れてしまいます。
我慢しましょう。（授業中は無言の時間も効果的？）

「話すとき」に気をつけたいこと②

《例2》 校内放送で連絡内容を省略していませんか？

「〇年〇組 〇〇〇〇、職員室まで」

生徒だけではなく、来校中のお客様も聞いています。

→ 丁寧に呼びかけましょう。

言葉を大切にすると姿勢は生徒に影響を与えます。



「書くとき」に気をつけたいこと

《例3》正しい字を使っていますか？

漢字、平かな、カタカナ

書き順は正しいでしょうか？ 誤字・脱字はありませんか？

安易な省略をしていませんか？

「先生の板書の字は見にくい。」

「ノートに書き写すときにどう書いたら良いかわからない。」

そんな生徒の声を耳にしたことはありませんか？



日常の些細なことから確認してみましよう。
授業改善の第一歩です。

国語教師が「言葉」を大切に扱わなければ言語環境はすぐに崩れてしまいます。



国語科教師の使命

目の前の生徒の課題を把握し、

言葉を適切に使って意思の疎通が出来る力を育てること。

未来を築く人材の育成